

土の深遠なる魅力、漆喰の素晴らしさ

富沢建材株式会社 代表取締役

富澤 英一

漆喰とウイルス対策

シックハウス、ホルムアルデヒドなど室内の環境汚染問題が浮上してかなりの年月が過ぎた。そして、地球レベルで猛威をふるった新型コロナウイルス感染症によるパンデミックは記憶に新しい。感染症5類へと移行され、以前のような感染症対策が講じられなくなったとはいえ、室内空気質の改善や抗菌性・抗ウイルス対策への関心は依然として高い。

そこでウイルス対策として家の内装に漆喰壁をお勧めしたい。古来の漆喰は、消石灰を主材に麻の繊維と海藻の糊を混ぜて作る自然素材の壁材である。長年販売に携わりその素晴らしさを実感してきた者として、間違いなく太鼓判を押せる優れたものだ。

強アルカリ性のため抗菌効果が強く、調湿性能を持ち、さらに防火性が高い。抗菌性については今後特に注目値する。金属、ガラス、プラスチック、木部に付着したウイルスは3~5日間も生存することが分かっているが、新型コロナ同系統のウイルスが漆喰壁に付着すると、2時間で97.5%不活化することが石灰メーカーの実験で実証された。

消石灰の殺菌効果を示す一例として、鳥インフルエンザや牛等の伝染病口蹄疫が発生した際のニュース映像で白い粉を撒いているのを見るが、あれは漆喰の主材である消石灰を用いた殺菌作業である。水の浄化や下水道の殺菌処理、ごみ焼却場の有毒ガス除去など、石灰は様々な環境維持保全の目的で用いられる。その石灰ベースの漆喰で内装を仕上げることで安全、安心な室内空間が生まれる。

漆喰の調湿機能

漆喰壁は抗菌効果に加えて、優れた調湿機能を備えている。梅雨のジメジメした時は室内の湿気や結露を吸収して空気を爽やかにし、逆に乾燥時は湿気を吐き出してくれる。

伝統的日本家屋では、布団や衣類を仕舞う押入れの壁にも漆喰を塗って湿気を取り、床下には漆喰の原料である石灰を撒いて地面からの湿気によるカビ対策や消毒消臭に用いる習慣があった。現在も玄関や下駄箱、クローゼット等の除湿・消臭用に石灰の機能を用いた商品が一般向けに販売されている。

電気がない時代には、大切なものを保管するため土蔵が数多く建てられた。土蔵の壁は、土で分厚い下地を作り、漆喰で仕上げられる。土壁と漆喰の調湿機能で室内の湿度は通年ほぼ一定に保たれ、万が一火災に遭った場合は耐火性に加え壁に蓄えた湿気を放出し内部を守ってくれる。米蔵、酒蔵、文庫蔵等、大切な家財を安全に長期保管するために漆喰の機能が生かされてきた。

私は漆喰の調湿機能を説明する時に衣類の話为例に出す。化学繊維の肌着や衣類と、綿やウール、シルクなど自然素材の通気性があるものとはどちらを着るのが快適だろうか。もちろん汗をかいても吸収してくれる後者だが、室内も同じで、調湿しないビニルクロスやペンキの壁より漆喰壁の方が快適なのは明らかだ。特に、多くの時間を過ごす寝室を漆喰壁にすれば、空気環境が改善して上質な睡眠が得られる。

漆喰の防火性

漆喰は抗菌性と調湿性に加えて、優れた防火性を特長としている。古くは奈良時代から高級壁材として社寺仏閣に用いられ、日本の建築文化を長い間守ってきた。

漆喰による防火建築の代表格は城郭である。姫路城を筆頭に、日本全国にあるお城の大半が壁面全てを白い漆喰塗りで仕上げている。通常の火災対策だけでなく、敵の襲撃で火を放たれても延焼を防ぐことが目的だ。火の付いた矢を射られても燃え移らないよう、屋根の裏側軒下まで漆喰